

室町文化（能楽）



* 小田家文書（柳井市金屋）和漢137 「下懸囃謡大成」

解説

観阿弥・世阿弥父子は、猿楽や田楽など民間で好まれていた諸芸能を集大成し、謡（うたい）・囃子（はやし）・舞（まい）の要素が統一された芸術性の高い能楽を完成させました。また世阿弥は、能楽の理論をまとめた「風姿花伝（花伝書）」を著し、足利義満もこれを保護したことから、能楽は上流階級の間に広まりました。

左の写真は1802（享和2）年に刊行された「新改正下懸（しもがかり）囃謡大成」という謡曲の本で、「高砂」ほか代表的な演目が100番収められています。また、巻末に囃子（笛・鼓・太鼓）の演奏の仕方も示されています。写真の箇所は能の演目の一つとしてよく知られた「羽衣」です。羽衣伝説を題材にしたストーリーで、天の衣を返してもらった天女が舞を舞い、天に帰っていく場面です。

下の写真は当時の笛の楽譜（唱歌譜）で「ヒヒウリウ」「ヒロホタウタウロ」などと片仮名書きで音階が記されています。

